

2 聞き取り調査

(1) 地域コーディネーターへの聞き取り

ア コーディネーターの経歴、活動目的 ①

県	地区	経歴等	その他経歴等についてのコメント	活動目的
栃木 1	日光市	自治会長 消防団長	学校に顔を出す機会が多かった。	・学校の要望に合致したボランティアを見い出し、活動を展開することによって、学校・ボランティアの双方が満足を感じられるようなマッチングを行うことを目的としてコーディネーターの仕事に当たってきた。学校支援ボランティアの活動をとおして、さまざまな世代の交流を図っていければと考えている。
栃木 2	佐野市	P T A副会長		・学校のためになるのならと当初は考えた。研修を通じ自分の中に芽生えた「地域の中の一人」という感覚を少しずつでも広げていきたいと思うようになった。学校と地域、家庭と地域…どれも人といかにつながりを持てるかということに気付いた。
栃木 3	宇都宮市	P T A活動		・学校支援の一環。児童のため、教員のため、地域住民の生涯学習への一助となること。
栃木 4	塩谷町	学校支援ボランティア		・学校とのつながりを強くし、学校の現状を把握し、学校の考え方を理解したい。そして、学校を通して子どもたちの気持ちをもっと理解していくたい。地域と学校の絆を強くしたいと考えた。
栃木 5	さくら市 (複数)	元P T A役員　元教員 家庭教育支援団体所属		・地域の人と子どもたちがふれ合うこと、地域のつながりづくりのお手伝いをすることができたらと思って活動している。
栃木 6	宇都宮市	小中学校でP T A会長 学校支援ボランティア		・学校に入ってみて分かるのは、教師が仕事に追われていること。中には雑用などはボランティアにできることもあると感じている。それによって、少しでも教師の負担が減り、子どもに向かう時間ができればと思って活動している。
青森 1	八戸市	P T A副会長 学校支援ボランティア	地元出身ではない方が、なじもうと努力するのでかえって良いのでは。	・たった一つのボランティアでも得ることの多さや周りの人に与える影響(善し悪しがあっても)などを感じ、今より次はより良い形にしていきたいという思いで活動している。
青森 2	青森市	読み聞かせボランティア	現役の保護者よりも、O B等の方が直接の関わりが薄い分、思い切った活動ができる。	・事業をより多くの人々の理解してもらい、ボランティア活動が円滑に展開されていくことを目的として活動してきた。学校の教員と保護者・地域の方々とを繋げて調整を図り、学校側の要望、

ア コーディネーターの経歴・活動目的 ②

県	地区	経　歴　等	その他経歴等についてのコメント	活　動　目　的
				ボランティアの思いを受け止めて伝えていき、そしてこのような活動の積み重ねが、みんなで子どもたちを育てていこうという地域づくりに結びついていくことを願っている。
青森 3	八戸市	P T A事務		・学校・保護者・地域・ボランティア、その間をまさにコーディネートする仕事に、難しさはあるものの充実感を感じるようになった。謝金が減額されても、自分の仕事が学校のために役立っているんだという気持ちで活動している。そして、子どもたちが「ふるさと」を意識できるようにしたいと考えている。
青森 4	八戸市	児童館勤務 民生児童委員 主任児童委員		・最初は単純に、学校・教員の負担を軽減し、子ども達と地域の方を繋ぐことと思っていたが、教員や子どもたち、地域の方がお互いに刺激し合い、顔が知れて言葉を交わすことによって、それぞれが元気になり、地域の中で学校が中心となって出来ることの多さに気付いた。そこで、今まであまり学校や子どもたちに関わることのなかった地域の方を、1人でも多く学校に来ていただくことによって、開かれた学校づくりをしていくことを目指した。
青森 5	青森市	小学校 P T A会長 中学校 P T A副会長		・今の子どもたちが育つ環境は、核家族や仕事をもつ親が半数以上をしめ、世代の違いや考え方の違いなどによって相互のコミュニケーションが減り、子ども同士でも話しかけても相手に断られることを不安に思って会話ができないなどの問題がある。また、保護者、地域の様々な団体などの『個』はあっても、それをつなぐ『線』の部分は弱く、大きな力を発揮できない現状がある。これらの環境を、少しでも改善するお手伝いができればと思っている。
新潟 1	新潟市	ミニバスケットボール部 保護者会副会長	月1回は学校に顔を出していた。	・地域で子どもたちを育てることができるようすること。関わった子どもたちが将来大人になったときに、地域に帰ってきて、自分たちがしてもらったときのようなサポートができるようになっていてほしいということ。

イ 学校との関わり

(ア) 苦労した点、効果を上げる工夫・ポイント ①

県	地区	学校・教員との関わりで苦労した点	学校・教員との関わりで効果を上げる工夫・ポイント
栃木1	日光市		<ul style="list-style-type: none"> ボランティア用の部屋がないため、教職員とコーディネーターとの打合せは職員室で行われる。かえってそのことが、教員とコーディネーターをすぐに顔見知りにさせ、教員とコーディネーターの関係をより近いものにしている可能性があると捉えている。
栃木2	佐野市	△すべての教職員に、事業を理解してもらうことに苦労した。	<ul style="list-style-type: none"> 用事をつくっては学校に通っていた。 入学式や運動会、文化祭、卒業式にコーディネーターを呼んでくださって「三毳唐沢SSCOOさん」と紹介していただけるので宣伝になると思、積極的に参加している。 異動により新しい校長になり、とにかく校長とのよい関係づくりに努めた。 教員とボランティアの関係づくりのために、教員が得意なことで講座を作ってもらった。
栃木3	宇都宮市	△一般の教員の皆様にはなかなか理解されなかった。学校側もコーディネーターとボランティアの区別がつかなく、コーディネーターに何をやってもらうのか分からなくて戸惑っていた。(ひな人形飾りを依頼されたこともある。)教員の側にすると、今まで自分たちでてきたことをわざわざコーディネーターを通さなくてはならないので、打合せが必要→時間がない→面倒、ということであった。	<ul style="list-style-type: none"> 当初から、校長の強力なサポートがあったが、教務主任を窓口に、コーディネーターの体制を整備していった。 事業開始時にどんなボランティアを取り入れた活動ができるか教員にアンケートを取って考えてもらった。 ボランティアティーチャー連絡会を作り、教員とボランティアの顔合わせをしてもらった。 入れるクラスと入れないクラスあるなど、子どもに不利益が出ることがないよう配慮した。 教員にはあくまでもボランティアであると伝え、過剰な気遣いや期待、不安を持たせない配慮をした。
栃木4	塩谷町	△こちらから積極的に動かないと要請が出てこなかつたこと。説明会も形だけ終わっていた。	<ul style="list-style-type: none"> とにかく足を運んだ。私は、教務の先生(3校とも)にはたらきかけをした。 先生方の会議の中で教育長から言っていたこともあった。様々な形での広報を続けることが大切と思った。
栃木5	さくら市 (複数)	△職員室は入りにくい雰囲気があった。学校に行っても担当と校長以外はほとんど話すことがなかった。他の教員は、自分たちには関わりがないという感じであった。	<ul style="list-style-type: none"> 現職教育でコーディネーターと教員の顔合わせの機会を作ってもらった。 夏休み等、時間のあるときにコーディネーターの趣味であるものづくりを教員に声をかけて一緒に行った。 定期的にコーディネーター連絡会を開き、学校の担当である社会教育主事有資格教員も交え、情報交換や今後の活動等について話し合い、交流する機会がある。
栃木6	宇都宮市	△中学校は教師の専門性が高く、授業に入るには厳しさがある。 △小学校よりも中学校は先生方が忙しい感じである。打合せの時間、コミュニケーションを図る時間が取れない。	<ul style="list-style-type: none"> 思い切って家庭科の先生にミシンボランティアを一度やってみないかという提案をしたところ、1度活動することができた。 中学校の場合、ボランティアが学校に入るだけでなく、中学生を地域の活動に参加させ、地域で子どもたちを育むというコーディネートも行つた。
青森1	八戸市	△活動が停滞気味だった	<ul style="list-style-type: none"> 学校が本当にボランティアを必要としているのか、先生方の気持ちを確認するために学校支援ボランティアについてのアンケート調査を行った。その結果、先生方には本当に必要とされているということが分かり、コーディネーター活動を続ける意欲になっている。 ボランティアを活動に取り入れるために、何といっても「百聞は一見にしかず」であり、実際にボランティアに活動していただくことが、教員に理解してもらう一番の方法である。

(ア) 苦労した点、効果を上げる工夫・ポイント ②

県	地区	学校・教員との関わりで苦労した点	学校・教員との関わりで効果を上げる工夫・ポイント
青森2	青森市	△中学校では、担当課が意向で説明をしても、校長先生自身が事業にマイナスのイメージを持っていて、実際に活動が進まない状況であった。	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校の図書ボランティアの活動でブックコートフィルムをかけた本を中学校にお持ちして、校長先生に「例えばこのような活動も可能です。」と話したところ、「ぜひ中学校でも。」と気持ちが動き、すぐに図書担当教諭を紹介してくれた。具体的な説明が大切であると実感した。 ・学校の流れを把握して、教員がゆっくり話せる時間を見つけて相談することが大切であり、重要なことは口頭ではなく必ずペーパーでも渡した方がミスも回避できて良い。 ・教員に活用して良かったと思ってもらえるよう、ボランティアからの意見・感想等は必ず学校側にフィードバックして、ボランティアの方々は学校に来ることを楽しみにしているという気持ちをコンスタンツに伝えている。
青森3	八戸市	<ul style="list-style-type: none"> △学習支援を教員の方から依頼されることがなかった。 △担当教員が変わるたびに最初から時間をかけて説得しなくてはならない。 △【国語科書写のケース】教員に働きかけてなんとか実施(4年目)できているが、教員の希望する時間数が多く（各クラス3時間ずつ）、ボランティアの人数がなかなか集まらなかった。 △ボランティアを入れるクラスと入れられないクラスの調整が難しかった。 △教員の希望に100%答えられないこともある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・コーディネーターから教員に働きかけた。 ・【調理実習のケース】初年度は、絶対いやと拒否された。理由は「調理実習の時は声を枯らして怒鳴っているので、そんな姿はボランティアには見せられない」というもの。 ・異動があっても、この活動にはボランティアが入るという流れ（前提）を作ってしまい、毎年活動が継続できるようにするのも方法である。 ・教職員との人間関係を築いていくことを工夫。1年目から3年目までは週2回の勤務だったので、お昼に職員室で給食と一緒に食べるようになり、昼休み時間や放課後など職員室での雑談の場に加わるなどして教職員との人間関係作りに努めた。 ・教員の名前を覚えるだけでも大変だが、こちらの名前を覚えて貰うことを重視し、廊下での挨拶（満面の笑顔付き）や声かけ（お天気のことや、服装を誉めるなどなんでも）に努めている。
青森4	青森市	<ul style="list-style-type: none"> △最初は現場の先生方に事業の内容を分かっていただくのに、とても時間がかかった。 △内容を分かっていただいても依頼は少なく、先生方も本当に頼んでいいのかどうか、また、地域の方が学校や授業に入るのに少なからず、抵抗があったように感じた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・まずは、ボランティアを入れていただいた先生から口コミで、他の学年や次年度の先生に伝えていただくことをお願いした。 ・先生方がコーディネーターに気軽に声をかけていただけるよう、長休み時間や放課後に出来るだけコミュニケーションが取れるようにした。 ・忙しい学校にボランティアが入るためにコーディネーターがパイプ役になって調整し、時には苦情等もあるがそれを受け止めるクッション役も果たしている。
青森5	青森市		<ul style="list-style-type: none"> ・学校に行った時は必ず校長、教頭に顔を見せ、ボランティア活動の様子や情報を提供し、何もない時でも学校の様子など会話をするように心がけている。 ・先生に廊下であった時は必ず声掛けをして本事業をアピールするようしている。 ・忙しい先生方との連絡に『依頼書』と『ボランティア決定書』を目立つようにピンク（地域本部カラー）の紙を使用している。
新潟1	新潟市		<ul style="list-style-type: none"> ・教員向けの通信を発行し、自分の悩みを打ち明けたり、ボランティアのお知らせをしたりしてきた。

(イ) 学校の変容、課題 ①

県	地区	学校・教員の変容・効果	学校・教員との関わりでの課題・その他
栃木1	日光市	○以前から教員との関係は良好であったが、事業開始以後、さらに教員方からのあいさつが増えたように感じている。	<ul style="list-style-type: none"> 教職員は、学校支援ボランティアに対する理解もあり、協力的であると感じている。また、そうした雰囲気ができあがっているため、他校より新たに着任した教員もコーディネーターが職員室に顔を出したりボランティアが授業等に関わったりすることへの抵抗感は少ないようである。 学校側の窓口である教頭も、引継ぎが上手くいっており、人事異動があってもスムーズに連携が行われている。
栃木2	佐野市	○校長室便り等に掲載される回数が増えたし、いろいろな教員が気持ちよく挨拶してくれるようになった。(あたりまえと思わず感謝) ○最初、ボランティアに依頼することに躊躇していた教員が遠慮なく依頼できるようになって、その結果、教員が別のものに時間がかけられるようになり、図書館の環境整備を進めることができた。	<ul style="list-style-type: none"> 学力格差が見られるが、学校へどうアプローチしたらよいか今後の課題。
栃木3	宇都宮市	○現在は、コーディネート体制がシステム化されていて、学校側では教務主任が窓口となり、校長や副校长をはじめ職員も理解がある。 ○職員は、突然のキャンセルでもコーディネーターに言えば大丈夫と思う位になった。 ○ボランティアを入れた活動が定着している。教員がコーディネーターを信頼してくれるようになった。	<ul style="list-style-type: none"> 校長の強力なサポートが支えとなっている。
栃木4	塩谷町	○学校では「学校は地域の中の一部である」という考えが出てきている。 ○子どもからは「またお願いします」「後輩のためにまた来てください」という声が聞かれるようになった。	
栃木5	さくら市 (複数)	○教員との距離が一層近くなった。	
栃木6	宇都宮市	○ボランティアが入った活動を喜んでくれてはいる。 ○中学生も地域活動に参加。	<ul style="list-style-type: none"> 学校を変容させるのは厳しい。 教師の理解次第で活動が活性化するかどうかは決まる。またせっかく軌道に乗ってきても異動によって、また振り出しに戻ってしまう。(わずかな期間で副校长が3人変わった) 年度当初にボランティア要請カードを出して必要なボランティアを記入してもらえるようにしたが、なかなか理解されず回収されない。
青森1	八戸市	○職員会議で教務主任がボランティアからの声などを職員に伝えてくれるようになった。 ○ボランティアの有用性を再確認でき、教員も積極的にボランティアを活用しようという意識が出てきた。	<ul style="list-style-type: none"> 今までとても恵まれていたと実感している。それまで校長・教頭とのコミュニケーションが良く取れていたので、困ったり悩んだりしても一緒に解決してきた。しかし、正直、昨年からは全くコミュニケーションは取れず、こちらから働き掛けても、興味が無ければだめなんだと痛感している。今年度は教頭も代わり、ますます苦労しているのが現実。今は教務主任が相談に乗ってくれるので何とか活動している状況である。事業として展開していくならばもっと管理職への講習や周知徹底が必要なのではないかと思う。
青森2	青森市	○校長先生はじめ教員自身もボランティアの方々が来ることを楽しみにしていて、玄関でも挨拶だけではなく様々な会話があり、学校全体が風通しよく明るくなっていると思われる。	

(イ) 学校の変容、課題 ②

県	地区	学校・教員の変容・効果	学校・教員との関わりでの課題・その他
青森3	八戸市	<p>○4年目にもなると、学校に保護者や地域住民がボランティアとして入ってくる状況があたりまえになってきた。それによって、教職員の姿勢にも変化がでてきた。</p> <p>○2年目になんとか実施できた際「各調理台に一人ずつのボランティアがついてくれたおかげで、時間的にも自分の精神的にも余裕をもって授業ができる。余裕のおかげで、生徒を別な角度から見ることができたのが収穫。来年も是非。」と喜ばれた。</p> <p>○校長も積極的に事業を推進しており、地域の人が学校に入るだけでなく、学校からも積極的に地域に子どもたちを出して活動するように働きかけており、授業(生活)の時間に地域に出向いての清掃活動や生徒会の奉仕活動を積極的に計画するようになり、地域との交流が盛んになった。</p> <p>○かつて東北一荒れた学校とまで言われたことがあったが、事業が始まって大人が学校に入るようになり、特に落ち着いた様子である。ボランティアが入ることが、非行の抑止力になっている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒達も、自分たちの学校生活のために親だけでなく地域ボランティアの協力が大きいと感謝している。また地域をふるさととして意識するようになった。 ・校長は過去に同校に勤務経験あり。PTA役員として活動していたコーディネーターとは以前から面識があり、強い信頼関係がある。 ・40数名の職員のうち毎年10名前後が車両を入する状況。 ・書道ボランティアの場合、専門的なものなので気軽に引き受けて貰えない。
青森4	青森市	<p>○事業を通して、確実に地域との距離感が縮まったと感じる。</p> <p>○学校というより先生方の表情がとても明るくなったような気がする。</p> <p>○学校は地域にお世話になっている。地域のために学校にできることは協力するという意識が育っている。(八戸小唄80周年記念流し踊りへの協力等)</p>	
青森5	青森市	<p>○1回でもボランティアに活動してもらった先生は、違う事業や翌年に繋げてくれている。</p> <p>○先生方がボランティアの活動を理解し、活動していただこうと考えてくれている。</p>	
新潟1	新潟市	<p>○通信を出さなくとも、直接依頼してくれるようになった。</p> <p>○教員とコーディネーターの信頼関係ができた。</p> <p>○成果は何と言っても子どもの落ち着きにつながっている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・校長の事業推進への意欲が高い。

ウ ボランティアとの関わり

(ア) 苦労した点、効果を上げる工夫・ポイント ①

県	地区	ボランティアとの関わりで苦労した点	ボランティアとの関わりで効果を上げる工夫・ポイント
栃木1	日光市	△書写の指導に関しては、自分の持つ人脈の中にそうした技能を持つ人がいなかったため、ボランティアを見つけるのに手間取った。	<ul style="list-style-type: none"> ・他の2人のコーディネーターから情報の提供を受けて対応することができた。 ・ボランティアの能力や性格などを把握し、ボランティアに入る学年まで考慮して人選を行っている。 ・ボランティアの職業や自由になる時間などにも配慮し、無理をせず活動を続けられる人だけに声をかけるようにしている。 ・ボランティアの中からコーディネーターを新たにお願いし、その人脈によりボランティアを見つけるようにした。 ・ボランティアに関する情報の交換・共有を行う上で、他の2校のコーディネーターとの月に1回の情報交換会は非常に有用であると感じている。
栃木2	佐野市	△ボランティアとしてどうかなと思う（ルールを無視して活動してしまう）人が参加してきたことがあり、希望してきた時の対応に苦労した。	<ul style="list-style-type: none"> ・とにかく話を聞いた。否定しなかったのがよかったです。 ・学校での活動が合わないのなら、もっと大きい受け皿である市のボランティアはどうかと勧めた。 ・ボランティアの参加回数が少ない人にも、気持ちよく参加していただけるようメールをまめに送り、感謝の気持ちや次回の誘いを伝えている。特に交流会の前にはこまめに誘って、つながりが絶えないようしている。 ・ボランティアが活動以外にも楽しめる時間を作りたいと思い、講座を開講することにした。また、講座を開講することで新しい可能性をつくっていける場にしたいと考えている。校長を講師に、校長の専門である歴史講座を作ってもらった。 ・一生懸命やってくれるボランティアには応えようという姿勢で対応している。 ・活動数が増えた減ったで一喜一憂するのではなく、ボランティアが定着するようにということを重視した。繰り返し、継続して活動できるようにしてきた。
栃木3	宇都宮市	△自薦のボランティアの中には、ボランティアとしてふさわしくない方もいることがある。	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティアの申し出を断るのではなく、その方にふさわしい仕事があるときにお願いできるよう、ボランティア登録を勧めている。 ・ボランティアが子どもの支援に入る前に、（年配の方には想像もできないような）子どもたちの現状について十分に説明するようしている。（スティックのりしか使えない子、片面だけ真っ黒焦げにする餅焼き、手を振って歩こうという子、羽ばたきしてしまう子etc） ・活動の前には、留意事項（守秘義務、宗教に関することは×）をきちんと伝えるようしている。 ・とにかく、ボランティアだということを念頭において、緊張して学校の門をくぐる方々に、授業にてていただくので、依頼するときはきちんと何度も連絡を取り納得してから入ってもらっている。 ・ボランティアとのお茶飲み話で出る話は重要な情報源である。その方の特技や適性を引き出すことができる。また、そのボランティアの方から紹介された方にボランティアになっていただくと上手くいくことが多い。 ・コーディネーターはアンテナを高く張って、つなぐことに徹するようにした。 ・最終的な依頼は副校長からしてもらい、学校から依頼されているという気持ちをもって活動できるよう配慮した。 ・学校に対してのクレーマーだけは出さないよう気をつけている。何か行き違いがあったときはコーディネーターが間に入ってクッショーンになるよう、お礼とお詫びはすみやかにを心がけている。

(ア) 苦労した点、効果を上げる工夫・ポイント ③

県	地区	ボランティアとの関わりで苦労した点	ボランティアとの関わりで効果を上げる工夫・ポイント
栃木4	塩谷町	<p>△140人のボランティアの中で、要請のない方々をどう生かしていくか。</p> <p>△「読み聞かせ」の依頼がありボランティアの方々に行っていただいたが、国語の授業のようなことを展開してしまい、先生方が顔を見合わせてしまったという事があった。後から分かったことであり、信用している方々であったが、送り出す前にきちんと確認しておけばよかったと反省した。学校はすごく気を遣ってくれていたんだと痛感した。</p>	<ul style="list-style-type: none"> それからは、事前にボランティアとの情報交換をきちんと行い、活動内容を把握してもらうよう心がけた。
栃木5	さくら市	<p>△声をかけても、丸付けボランティアなどは先生がやる仕事だと、断られてしまうことがあった。ボランティアによって意識に温度差がある。(何でも協力してやろうという方ばかりではない)</p> <p>△ボランティアリストがあり、できるだけたくさんの方に活動してほしいと思ってはいるが、依頼を受けた以上は自分が知っていて、信頼のおける人にお願いすることになってしまう。人材の活用が難しい。</p>	<ul style="list-style-type: none"> (元教員の立場を生かしながら)学校(教員)とのパイプになれるよう努めた。例えば、グループごとにボランティアが入るときには、ボランティアによっては立ち位置が分からぬこともあるので、ボランティアをさりげなくグループに割り振るなど上手く配置するようにした。 教員の声を休み時間にボランティアに直接聞かせるようにした。 市教委担当とよく連絡を取り合っている。ボランティアが見つからないとき等は大変頼りになる。 依頼を受けた以上は、よく分かっている人、しっかりした人に活動していただきたいということを意識している。 コーディネーターは黒子に徹すること。自分が主役になるのではない。せっかくのボランティアの活動を邪魔することがないように活動してきた。
栃木6	宇都宮市	△ボランティア活動を活性化すること。1回きりではなく、活動を続けてほしいが難しかった。	<ul style="list-style-type: none"> 市教委主催の研修で情報交換を行うことにより、他地区的コーディネーターとのネットワークができたので、そのネットワークが大変役立った。このネットワークではコーディネーターが作った広報紙を交換して参考にしたり、テレビカバーづくりなどのボランティアによる活動の情報交換を行ったりして、活動を広げるのに大変役立った。 スムーズなコーディネート(地域の情報を拾えるようにする)のために、小学校区それぞれの地元からコーディネーターを配置するようにした。 活動後、ボランティアをボランティア室で待っていて、お茶を出しながら次の活動についての話ををするようにした。(次につながるように)
青森1	八戸市		<ul style="list-style-type: none"> 初めは自分もボランティアとして一緒に参加していたが、仕事の関係で(小学校職員になってから)参加出来なくなり、今はコーディネーターに徹している。(あれもこれもと無理しないことも大切) ボランティアの方々との関わりは、一緒にボランティアに参加出来なくても会った時には必ず声を掛け、何気ない会話の中からボランティアの気持ちをくみ取りたいと思っている。 ボランティア通信を作成している。ボランティアして下さった方を保護者に紹介したり、小さくてもやりがいを見つけられたら…と思っている。 教員にもボランティアに声をかけてもらえるよう勧めている。 「こちらも助けて貰って有難いけれど、ボランティアを依頼するという事は実はそれも『ボランティア』なんだよね。」という話があつた。ボランティアに来て頂いて申しわけないと思っていても、実は声がかかるのをとても心待ちにしているのだということを実感している。だからといって、好きで来ているんだからという考えになってしまいかねない。学校とボランティアの関係をしっかりと作っていくことがコーディネーターの務めである。

(ア) 苦労した点、効果を上げる工夫・ポイント ②

県	地区	ボランティアとの関わりで苦労した点	ボランティアとの関わりで効果を上げる工夫・ポイント
青森2	青森市	△自分の力を発揮したい、子どもたちのために頑張りたい、という気持ちが強すぎて、目的からずれていくボランティアがいる。	<ul style="list-style-type: none"> ・事前の打ち合わせでその学習の目的を確認して、また終了後もふりかえりの時間（お茶を出して）を持ち、次回の活動に繋げていくことを欠かさないようにしている。 ・活動の感想だけではなく、学校に対する思い、要望など、ボランティアからの発信があったときには、しっかりと丁寧に受け止めて、学校側に伝えていく。 ・子どもたちや先生方の感想等は、ボランティアの方々には必ず伝えるようにしている。感謝の言葉はボランティアのエネルギーになる。 ・図書ボランティアに対しては、途中でお茶を差し入れて顔出しをしている。
青森3	八戸市		<ul style="list-style-type: none"> ・「ありがとうございます」という感謝の言葉がボランティアに対するすべて。 ・お茶やお菓子付きの雑談（慰労会 or 反省会）は欠かせない。
青森4	八戸市	△事業のはじめの頃は、登録してくださる方・先生方の要望に沿う時間帯に活動していただける方が少なく、要望に沿えないことも多くあった。	<ul style="list-style-type: none"> ・守秘義務ややりすぎのない様、直接言いにくい事はボランティアの部屋に掲示して共有した。 ・ボランティア終了後、ティータイムなどを設けて、ボランティアどうしのコミュニケーションをはかった。
青森5	青森市	△PTA活動とボランティア活動の住み分けで、PTA執行部の理解がなかなか得られなかった。	<ul style="list-style-type: none"> ・何度も説明をするなどの努力を重ねた。 ・来校時は玄関まで出迎え、活動後は雑談しながら感想を聞き、次の活動がやりやすいよう改善するよう心がけた。 ・お礼の言葉は忘れないようにしている。 ・活動（雪の中での登下校見守り等）へのお礼を込めて、学校で給食を食べてもらひながらの交流会を設けた。
新潟1	新潟市	<p>△当初、自尊心が強いボランティアがいて、先生方への応対が横柄だったり、他のボランティアとぶつかってしまったことがあった。「～してやっている」という感覚であった。</p> <p>△ボランティアが組織化し、活動が活発になってきたが、自分の気持ちを子どもや先生に押しつけるような傾向もある。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・とにかく説明した。自分は子どもたちのためになればいい、先生のためになればいいという気持ちでコーディネーターをやっていること、縁の下の力持ちというポジションでいてほしいということを話した。一対一でなく、何人かで話し合う機会も作って、周りの人の話を聞く機会を作った。 ・どんな活動でも受け入れるのではなく、線を引くべきところは引いて、学校が迷惑だと思うことはやめてもらう。ときにはそういうボランティアには手を引いてもらうこともある。 ・ボランティアの話や言い分も聞いて、認めて、合わないからといって辞めてもらうということはしなかった。

(イ) ボランティアの変容、課題 ①

県	地区	ボランティアの変容・効果	ボランティアとの関わりでの課題、その他
栃木1	日光市	○子どもたちと活動することに喜び・楽しみ・生きがいを感じるようになり、当初よりもやる気がアップしている。	・現在でもボランティアとの間には良好な関係が築かれているが、さらによりよい関係づくりを進めるためにボランティア交流会を行いたいと考えている。しかし、これは企画段階で、現在のところ、まだ実現していない。 ・ボランティアは非常に協力的で依頼を断られたケースはほとんど無い。また、事後のクレーム等やボランティアをやめるケースも現在までのところない。
栃木2	佐野市	○初めは遠慮がちだった方も、積極的に責任感をもって参加してくれるようになった。 ○子どもと関わることで、自分の学び直しになると感じている方、改めて本に向き合う時間が持ててうれしいという方、普段は関わることのない子どもたちと楽しい時間を過ごせて、また次回も参加したいと言う方など、楽しみ、喜び、生きがいを感じている。 ○クレーマーから支援者になったケースもあった。	
栃木3	宇都宮市		・優秀なボランティアが紹介してくれるボランティアは優秀である。 ・学校はクレームが出ると活動しなくなる傾向がある。
栃木4	塩谷町	○ボランティアの方（40～80代）は、皆さん自主的に活動されてきている。 ○講座等に参加し、自己研鑽をするボランティアも出てきた。	
栃木5	さくら市	○一度活動したボランティアが継続して活動してくれるようになった。 ○活動したボランティアが仲間に「楽しかったよ」などと声をかけて、ボランティアが増えた。 ○城下町の伝統である寒竹囲いを環境ボランティアが作ってくれている。地元の観光ボランティアも巻き込み、広がりを見せている。 ○ボランティアが活動をとおして学校が忙しいということに気づき、学校を支援しようという意識が生まれてきた。 ○読み聞かせボランティアどうしが、月1回スキルアップと図書の選定も兼ねて自主講座を立ち上げた。	
栃木6	宇都宮市	○活動をしているうちにボランティアが声を掛け合ってボランティアが増えている。	・活動がなかなか活性化せず、次の活動につなげることができなかった。
青森1	八戸市	○参加して下さった方々からは、参加して良かった、子どもの様子が見られて良かったとの声が多数聞こえている。 一度、参加してくれた方はほとんど次も参加して下さるので感謝している。 ○保護者以外の地域のお年寄りが誰かに頼りにされるという事をとても楽しみにしているということが分かった。地域の方が学校にくるということは、学校によっては負担なのかもしれないが。	・昨年までは教頭がこまめに声をかけてくれたり挨拶を徹底してくれていたが、今年度は全くなく、今後の保護者の反応に不安を覚えているが、参加して下さった方々からは、参加して良かった、子どもの様子が見れて良かったとの声が多数聞こえている。
青森2	青森市	○最初は控え目であったボランティアが、人（教員、他のボランティア、子どもたち）と積極的に会話するようになり、活動を楽しみ、自主性を感じるようになった。	
青森3	八戸市	○最初はおそるおそる来てくれた（特に中学校は敷居が高いらしい）ボランティアも、子どもたちと直接かかわる活動ではとても楽しそうである。	
青森4	八戸市	○ボランティアも最初は構えていらっしゃることが多かつたが、最近では自然に楽しんで来てくださっている。 ○学校に來るのが楽しいとおっしゃってくださる。	

県	地区	ボランティアの変容・効果	ボランティアとの関わりでの課題、その他
青森5	青森市	<ul style="list-style-type: none"> ○保護者のボランティアはPTAでは味わえない喜びを感じている。 ○学校の様子がボランティアになって分かることが多く、学校のよき理解者となっている。 ○活動が生活の張り合いになっている。 ○PTA執行部も理解してくれるようになった。 	
新潟1	新潟市	<ul style="list-style-type: none"> ○活動をとおして、ボランティアの性格が穎やかに丸くなっていくのが感じられた。 ○「先生方って大変だな」という声が聞かれるようになり、学校への理解が深まってきた。 	

エ 地域社会との関わり

(ア) 苦労したこと、効果を上げるポイント ①

県	地区	地域社会・地域住民との関わりで苦労したこと	地域社会・地域住民との関わりで効果を上げる工夫・ポイント
栃木1	日光市	△現役の保護者世代は、日々の仕事が忙しく、なかなか学校の行事等に関わることが難しい上、学校支援ボランティアをはじめ、学校でどのようなことが行われているかについて把握することが困難である。	<ul style="list-style-type: none"> ・学校だよりに学校支援ボランティアの記事を掲載してもらうようにした。 ・学校からの依頼があると、適任と思われる人のところにどんどん出かけ、ボランティア御騒の声かけを行っている。 ・地域に出かけた際には、積極的に地域の方に事業の周知を行っている。 ・さらなる活動の拡大・継続のために、ボランティアの中から、新たに2名にコーディネーターをお願いした。 ・学校だよりに学校支援ボランティアの記事を掲載してもらうようにした。
栃木2	佐野市		<ul style="list-style-type: none"> ・連携に関しては一步引いてしまっている団体もあるが、積極的につながりを持つように努めている。 ・なるべく地域の行事に参加するよう心掛けようになった。 ・足繁く公民館に通い、いろいろな団体と知り合うようになった。 ・5月総会時に教育委員会担当者と公民館に出かけた。館長から団体に声をかけてもらい、写真の展示にこぎつけた。 ・公民館で打合せ(勉強会)を行うことで、利用黒板に記載された団体名に関心を持ってくれる人が現れた。(広報や公民館とのつなぎのためにたまには、公民館を使うことも効果的である。) ・コミュニティカレンダーを作成・配布し、学校の行事等を住民にも知らせるようにした。
栃木3	宇都宮市		<ul style="list-style-type: none"> ・回覧で地域に事業の周知を図っている。
栃木4	塩谷町	△全戸にボランティア募集のチラシを配布したが効果が薄かった。	<ul style="list-style-type: none"> ・もとからボランティアをしていた人(キーパーソンになる人)に声をかけて集めた。 ・老人会、自治会等に呼びかけて、事業の周知と協力をお願いした。 ・公民館にコーディネータの居場所があることも効果的(人が集まる)。 ・公民館を会場としたボランティアとの交流会を作った。
栃木5	さくら市		<ul style="list-style-type: none"> ・地域住民への働きかけは、コーディネーターからは特にやっていない。市教育委がその役割を担っている。 ・地域の人はプリントを配っただけでは動かない。直接声をかけることがきっかけになる。 ・校長が活動内容を広報に載せてくれている。
栃木6	宇都宮市	△自治会長さんたちは、学校に何かをしたいという気持ちをもっているが、情報がないので活動できない。 △回覧板を活用して情報提供したり、チラシをまいたりしているが効果は不十分。(しかし、)見るのは3割くらい。関心を持つ人はもっと少ないと思う。	<ul style="list-style-type: none"> ・情報の共有のためにコミュニティカレンダーを作って、(予算があったときは全戸)配布した。ただし回覧板で配ったが取らなかった家庭もあった。見づらいというクレームもあったが、それだけ行事があることを理解してもらうためには必要だと思っている。 ・自治会長とは仲良くしている。まちづくり協議会でもつながりがあるので、懇親会などにも出させていただいている。地域に親しい人がたくさんいた方がやりやすい。
青森1	八戸市	△出身が地元ではないこと、転勤族で地元に詳しくなかつたなど地域での苦労はたくさんあった。	<ul style="list-style-type: none"> ・当初、PTA副会長をしていたので、地域の行事や会議などにも何気なく参加するのではなく、顔と名前を覚えるつもりで参加してきた。
青森2	青森市		

(ア) 苦労したこと、効果を上げるポイント ②

県	地区	地域社会・地域住民との関わりで苦労したこと	地域社会・地域住民との関わりで効果を上げる工夫・ポイント
青森3	八戸市		<ul style="list-style-type: none"> ・地域の拠点である公民館との関係づくりを大切にしている。地域団体とは直接連絡することもあるが、公民館館長さんに間に入つてもらうことが多い。間に入つてもらう公民館との関係を保つようしている（定期的に訪問、時には手土産を持参して）。地域住民の声も公民館を通して聞いている。 ・地域住民の声を地域密着型便り「ブルースカイ」にも載せている（具体的に感想が聞ける）。ちなみに掲載されている学校便り「一心」（校長が毎月発行）と地域密着型便り「ブルースカイ」（不定期発行 コーディネーターが編集長でボランティアが作成）は毎月1回町内会各班回覧用（地域への情報発信）としてコーディネーターが配布している。（班数600部印刷 住民数約1万8千人 町内数32） ・学校に町会長が集まる行事の際には、校長に事業についての話をしてもらうよう働きかけている。
青森4	八戸市	△学校同様に事業に内容を地域に皆さんに知っていた だくことが難しかった。	<ul style="list-style-type: none"> ・回覧や各種団体の集会に伺つて説明を繰り返したり、地域の中でも皆さん が集まるところを聞いたり、見たりしたら、積極的に声をかけて常にコミュニ ケーションを取ることを心がけた。 ・団体の長の方には、出来るだけ事業の報告や学校のことを伝え、地域住民 の皆さんには公民館まつりに活動報告を掲示したり、PTAの皆さんには広 報誌にのせていただきたりして、事業の周知の努力をした。
青森5	青森市		<ul style="list-style-type: none"> ・事業開始時、学区内町会長と地域団体に事業説明と協力依頼のため、本事業パンフレットや校長・PTA会長・地区会長連名文書とボランティア募集チラシを持参し、12町会会議に出席した。同様に民生委員会にも出席し、説明を行つた。 ・地域ボランティアが活動した様子を町会長に機会あるごとに話し、また地方広報紙に記事として掲載している。
新潟1	新潟市	△事業協力のはたらきかけで苦労した。	<ul style="list-style-type: none"> ・どんどん地域にでかけて、町会長等との人間関係作りに努めた。ご主人が 町会長ならば、まず奥さんと仲良くなるよう工夫した。 ・あえて深く考えず、飾らず、知らないことを勉強させてもらつてはいるとい うことを意識している。

(ア) 地域社会・地域住民の変容、課題 ①

県	地区	地域社会・地域住民の変容・効果	地域社会・地域住民との関わりでの課題・その他
栃木1	日光市	<ul style="list-style-type: none"> ○新しい2名のコーディネーターの人脈により、ボランティアはさらに増えつつあると感じている。コーディネーター着任からの3年あまりでボランティアが3割程度増加した。 ○事業の周知が拡大するとともに、地域住民の中にも今まで以上に学校のために役に立ちたいという意識が広がり、老人会から学校敷地内や周辺の除草を行いたいなどの申し出も見られるようになった。 ○学校だよりの記事を話題に、保護者世代と祖父母世代の交流が生まれてきている。 	
栃木2	佐野市	<ul style="list-style-type: none"> ○コミュニティカレンダーの配布により、事業に関心をもつ人が増えてきた。 ○声をかけ合う人々が広がった。今まで、話をしなかった年代の人とも声をかけ合うようになった。 ○苦手だった婦人会のおばさんも、ささいな会話でつながりができ、会を認知してもらえるようになった。 	
栃木3	宇都宮市	<ul style="list-style-type: none"> ○学校の保護者として活躍した人たちが、地域の世話役として活躍を続ける場となっている。80歳を過ぎてもボランティアをしてくれる方々がいる。皆、依頼を受けることを楽しみにしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校区内の地域が、もともと地域で子どもたちを育もうとする意識が高く、活発に活動する地域団体がたくさんあり、その方々の協力なくしては学校経営は上手くいかないと校長も認める程の地域。学校支援はあたりまえの地域なので導入はスムーズだった。
栃木4	塩谷町	<ul style="list-style-type: none"> ○学校に対しての気持ちがさらに強まり、事業に協力してくれた。 ○学校が地域の人の居場所にもなってきている。 ○震災時にお互いの安否等の声のかけ合いができた。(活動と一緒にやった仲間だからこそできた。) 	
栃木5	さくら市	<ul style="list-style-type: none"> ○広報等をとおして、地域の関心が高まっている。 ○地域の子どもが関わることで、地域の会話が増え、町が明るくなった感じがする。 	
栃木6	宇都宮市	<ul style="list-style-type: none"> ○地域の人との関わりが深くなり、地域の人が学校のために何かをしたいという意識の強さが感じられる。 	
青森1	八戸市	<ul style="list-style-type: none"> ○今現在はPTAでなく地域住民になったが、地域の人・団体の方に、様々な場面で声をかけていただくようになり(おかげで休みなし...)、困った時には助けてもらっているので助かっている。 ○ほとんどが津軽族という特殊な環境の子どもたちだが、地域の方々が故郷を作つてあげたいと言って下さり、とても感謝している。 	
青森2	青森市	<ul style="list-style-type: none"> ○地域のボランティア団体、まちづくり団体等が事業によって横のつながりを作ることができた。 ○地域で子どもの話題が増えてきた。 ○事業を理解してくれている人が自分の地域でPRをしてくれたり、人を紹介してくれることも増えてきた。 ○学校と地域との距離が縮まるとともに、学校に何か協力していきたいという地域住民の思いが感じられる。 	

(イ) 地域社会・地域住民の変容・課題 ②

県	地区	地域社会・地域住民の変容・効果	地域社会・地域住民との関わりでの課題・その他
青森3	八戸市	<ul style="list-style-type: none"> ○地域の人が学校に入ることにより、住民の学校への関心が高まり、地域に見守られた学校という感がある。 ○公民館が学校と地域の連携の役割を果たしている。生徒会活動から始まった「ハッピートライアングル活動」(ペットボトルのキャップを集めて車いすに替える活動)が公民館を収集の窓口にすることで、地域住民からも協力してもらえるようになった。 	
青森4	八戸市	<ul style="list-style-type: none"> ○地域協議会での話題が、学校のことだけでなく、地域のことについての話題が多くなった。 ○地域のお互いの顔が見えるようになった。 ○確実に学校に入っていただけの住民の方が増え、通学路での見守りや、子どもたちに声をかけてくださる方が増えた。 ○震災時(津波)に中学校、小学校ともに避難所となった。そこで活躍したのはPTAや学校支援ボランティアで活動してきた人だった。皆避難することで精一杯だったが、学校によく入っている住民・ボランティアは用具の場所や校内の様子が分かっているので、すぐに対応できたのである。いつものやりとりが役立った。 ○長年実現できなかった地区運動会と学校の運動会も共催が決まった。 	
青森5	青森市	<ul style="list-style-type: none"> ○子どもたちのために何かしたいと思っても、何もできない歯がゆさを感じていたたくさんの地域住民の方が、ボランティア活動をとおして、それを払拭し、満足感を得ることができた。 	
新潟1	新潟市	<ul style="list-style-type: none"> ○町会長たちが学校に対しても周囲の人たちにもやさしくなった。人が丸くなった。たくさん人と顔を合わせることが増えたことから。学校のことを気遣ってくれるようになった。(相手の都合も考えてくれるようになった。) ○地域活動が盛んになった。 ○学校を舞台に活動する人が増えた。 ○学校ではできないことを地域活動として反映している。 	

才 学校支援ボランティアによる活動をよりよい地域づくりに役立てるために ①

県	地区	学校支援ボランティアによる活動をよりよい地域づくりに役立てるために
栃木1	日光市	<ul style="list-style-type: none"> ・何より、学校支援ボランティアの活動をとおして、さまざまな世代の交流を図ることが重要であると考えている。地域の中でさまざまな世代間の交流が生まれていることが、よりよい地域づくりにつながっていくと考えている。 ・学校支援ボランティアの活動推進に関しては、教職員の理解が特に重要であり、教員が地域の人々に遠慮せずに協力を依頼できるような、あるいは素直にボランティアの申し出を受け入れられるような体制づくりを管理職が進められるかどうかが重要なポイントであると考えている。
栃木2	佐野市	<ul style="list-style-type: none"> ・人も交えて自分がまず地域に出ていかないとつながりは持てない。小さなつながりからしか大きなつながりは生まれないので、一期一会を大切にする。また、自分と同じ考えの人ばかりが正しいわけではないと肝に銘じること。 ・声をかけ合う人々が広がった。今まで、話をしなかった年代の人とも声をかけ合うようになったのは地域づくりの第一歩だと思う。 ・自分自身コーディネーターをやるようになって、初めて地域を意識するようになった。隣の町内の人、知らない団体を知るようになった。まずは地域を知ることが地域づくりにつながるのでは。 ・地道にこつこつと続けていくこと。学校を中心に行き交う空間作りを意識していく。 ・しっかりと関心を持つ人が増えること。コーディネーターを誰かに譲ることも。誰かに譲る事で別の層に広がっていく。人が変わらないと活性化していない。違う色が入らないと広がっていないこともある。
栃木3	宇都宮市	<ul style="list-style-type: none"> ・コーディネーターは、生活にゆとりのある方（時間的にも金銭的にも）がなっている。またそうでなければできない。学校支援地域本部事業の趣旨には賛同するし、必要性を認識しているが、長続きさせるためにはコーディネーターの善意に期待するだけではなく、それなりの金銭的措置も考慮する必要はある。 ・開かれた学校づくりが大切である。開かれた学校とは、守秘義務を徹底し、その上で子どもたちのためになるという方向性をしっかりともち、地域を信頼することだと思っている。せっかく始まって定着した、コーディネーターとの信頼関係を上手に活かしてほしい。コーディネーターもやりがいを感じているし、地区の方々も依頼を心待ちにしており、たいへん協力的である。
栃木4	塩谷町	<ul style="list-style-type: none"> ・顔を合わせたら声を掛け合い、きっかけをつくり地域のコミュニティづくりに貢献する。 ・個人で何かできることはいか考へてみる。地域の方々は、自分の力が役に立っていると思うと前向きになる。そのことが地域づくりにつながる。 ・経験豊富な方や専門的な方など多くの人たちがいるが、まず声をかけ地域のイベント等にどんどん参加・協力していただくこと。 ・ボランティアの中から、地域コーディネーターとなる人が出でくれるといふと思う。そういう人を育てたい。
栃木5	さくら市	<ul style="list-style-type: none"> ・大変な事業であるが、これを続けていくことがよりよい地域づくりにつながると思う。1人ではとてもできないので、多くの人が関わるようしていく。コーディネーターを増やすことも活性化につながっていくと思う。
栃木6	宇都宮市	<ul style="list-style-type: none"> ・学校を中心に行き交う組織ができるといい。地域にまちづくりのための組織ができるといい。例えば、防犯というと子どものためだけでなく、振り込め詐欺に代表されるように高齢者が関わるところもある。その対応には、まちづくりに向けた「防犯部会」あるとよい。同様に学校については、「学校を支援する部会」を作った方が、学校と地域がつながった地域づくりにはよいのではないか。 ・とにかく開かれた学校をつくっていくこと。そのためには学校の理解が大切である。管理職向けの研修を行ったり、社会教育主事有資格者など中心になる教員が校内で活動しやすいように配慮することが必要である。

オ 学校支援ボランティアによる活動をよりよい地域づくりに役立てるために ②

県	地区	学校支援ボランティアによる活動をよりよい地域づくりに役立てるために
青森1	八戸市	<ul style="list-style-type: none"> ・やはり学校の意識。いくら地域住民が学校に何かしてあげたい、役に立ちたいと思っていても、学校側が受け入れる気持ちがなければ無理だと思う。管理職は大変だと思うが、地域の方との付き合いが面倒、教員は自分でも出来る、そう思っているうちは地域全体が良いバランスにならないと思う。そういう意識を変えて、ボランティアを受け入れる体制づくりしていただきたい。 ・今までお茶を飲みながら良く顔を出していた方も今年度はほとんど来なくなり、近辺のお年寄りの方々も隣の小学校にボランティアで参加していると聞き（同じ学校区なのでまだ良いが）、残念である。やはり、子育てを終わった世代の方々は何かで学校に恩返しをしたいと思っているんだなと実感している。子育て真っ只中の保護者より、経験豊富で時間がある方々が地域には沢山いる。地域の方々に見守られて育った子供がいつか大人になり、自分もそういう人間に育っていくのではないかと思う。
青森2	青森市	<ul style="list-style-type: none"> ・どのような活動をしているのか、地域に見えるようにすることが大切である。三内地区は町会組織がしっかりとしているので、町長が活動を把握して地域に発信できる流れをつくり、また「活動してみたい！」と思っている方々の情報をこちら側も察知できるようにする。併せて、既存の団体との情報交換も大切にして、協力体制が組めるようにしておく。この事業をより多くの人々に理解してもらい、学校支援ボランティアの輪が広がっていくことは、地域においても子どもへの関心が高まったり、世代間の交流、近隣の町会との交流が盛んになっていく。結果、それは元気なまちをつくっていくことに結びつく。
青森3	八戸市	<ul style="list-style-type: none"> ・学校に地域ボランティアが入って活動するだけでなく、子どもたちもどんどん地域で活動し、相互交流することにより、地域も変わっていくと思う。
青森4	八戸市	<ul style="list-style-type: none"> ・この事業で地域のお互いの顔が見えるようになった。これからは若い人も動かして行かなくてはならないことに気がつき始めている。課題は、やはりもっとボランティアを増やすことである。しかしながら、無理に増やすのではなく、1年に1人でも2人でもいいと思っている。
青森5	青森市	<ul style="list-style-type: none"> ・昨今若い世代の方々は、自分の家庭生活にしか目を向けない傾向があり、同じ町会に住んでいる人も知らないし、関心がない人が多いと感じている。しかし、ボランティア活動をとおして年代や経験など違う地域や保護者の方が「これから社会を担う子どもの健やかな成長のため」という同じ目的のために活動し、交流する機会があり、その機会が増えていくことで地域へ目が向けられ、意識が高まっていくことで、地域の輪が広がり、結びつきが強まり、その結果、地域の発展につながっていくと思う。
新潟1	新潟市	<ul style="list-style-type: none"> ・コーディネーターは代わって（代替わり）いかなくてはならないと思っていたが、今は続けていきたい。仲の良いコーディネーターどうし、みんなで楽しくやっていけば良いと思っている。学校のコーディネータールームが、PTA室、コミュニティ協議会の事務所も兼ねており、いろいろな人が出入りしており、人の交流の場になっている。人と人との交流があって、お互いが尊重し合えるようになる。

(2) 県外教育委員会への聞き取り調査

ア 青森県教育委員会

学校と地域を結ぶコーディネーターの養成による学校支援活動の充実

1 事業の実施状況

青森県教育委員会（以下県教委）では、平成 19 年度に県単独事業として「地域による学校支援の基盤強化事業」を立ち上げ、学校と学校支援ボランティアの協働による教育活動の取組の定着に努めてきた。平成 20 年度からは、これを「学校支援地域本部事業（以下事業）」と合わせて実施し、「地域ぐるみで子どもを育む活動」のさらなる強化を図ってきた。

青森県における学校支援地域本部の設置状況は以下のとおりである。

平成 20 年度 18 市町村 36 地域本部 69 校（小学校 51 校 中学校 18 校）

平成 21 年度 22 市町村 48 地域本部 97 校（小学校 68 校 中学校 29 校）

平成 22 年度 21 市町村 44 地域本部 97 校（小学校 69 校 中学校 28 校）

2 研修会の充実

県教委では、事業実施以前から学校支援ボランティア活動の活性化のためにコーディネーターを配置することを重視し、コーディネーター養成に力を入れてきた。（平成 17～18 年度「学校と地域を結ぶコーディネーター養成セミナー」、平成 19 年度「地域コーディネーター養成講座」等）

平成 20 年度からは「学校支援コーディネーター養成講座」、「学校支援ボランティア研修交流会」等の研修会を実施して、学校と地域の連携の必要性、意識啓発、取組の効果等の周知・広報を図り、コーディネーターの養成・資質の向上をはじめとする学校支援体制の整備に努めてきた。養成講座、研修交流会はいずれも県内 6 地区（教育事務所単位）ごとに実施された。地区ごとに実施することにより、受講者の参加負担が軽減され、多くの受講者の参加が促された。また、養成講座では各地区とも同じプログラムで実施し、地区による研修内容に差が生じないように配慮するとともに、県全域での活動の推進と活性化を図った。研修内容としては、県教委担当から活動方針、大学教授等による講義・演習、活動中の県内学校支援コーディネーターによる事例発表等を取り入れた。

これらの充実した研修会により、優れたコーディネーターの養成と資質の向上と関係者同士のネットワークづくりが図られ、県内各地における特色ある学校支援活動につながった。

3 事業の成果

青森県では学校支援ボランティア活動を、4 分野（①学習アシスタント ②ゲストティーチャー ③環境サポート ④施設メンテナー）に分類し、取組状況を調査（平成 22 年度実施「学校と地域との連携に関するアンケート」）したところ、各校において年々複数分野の取組を行う学校が増えているという結果が出ている。このことは、事業によって多様な学校支援活動が推進され、学校支援ボランティア活動が着実に浸透していることを意味するものである。

また、事業を実施してきた学校・コーディネーター・市町村教育委員会を対象に行った「平成 22 年度 学校支援地域本部事業の事業評価に関する調査」では、事業の実施効果について、学校 95%、コーディネーター 88%、市町村教育委員会 100%が事業によって「成果を得られた」と回答している。さらに、コーディネーターを配置した効果について、学校 96%、市町村教育委員会 100%が「効果があった」と回答している。事業の要としての学校支援コーディネーターの活躍が確認された。これは、言い換えれば県教委が推進してきたコーディネーターの養成が、事業の大きな成果をもたらしたということができる。

【参考資料】

学校支援コーディネーター養成講座

開催期日・会場・講師	申込先
西北地区 平成22年 8月 4日(水)～5日(木) 会場：五所川原地域職業訓練センター 講師：弘前大学生涯学習教育研究センター 講師 深作拓郎	西北教育事務所
東青地区 平成22年 8月23日(月)～24日(火) 会場：青森県総合社会教育センター 講師：青森中央学院大学経営法学部 教授 高橋 興	東青教育事務所
上北地区 平成22年 8月30日(月)～31日(火) 会場：七戸中央公民館 講師：日本大学文理学部教育学科 教授 佐藤晴雄	上北教育事務所
中南地区 平成22年 9月 8日(水)～ 9日(木) 会場：青森県武道館 講師：日本大学文理学部教育学科 教授 佐藤晴雄	中南教育事務所
三八地区 平成22年10月26日(火)～27日(水) 会場：八戸市福祉公民館 講師：宇都宮大学生涯学習教育研究センター 教授 廣瀬隆人	三八教育事務所
下北地区 平成22年10月28日(木)～29日(金) 会場：むつ来さまい館 講師：宇都宮大学生涯学習教育研究センター 教授 廣瀬隆人	下北教育事務所

日 程

【1日目】

研修日程・内容	方法	講師
【10:00～10:30】受付		
【10:30～10:40】開講式		
【10:40～12:00】 「学校支援ボランティアコーディネートの実際」 ～課題の解決方法と成果～	講義・演習	〔西北・三八〕出崎真里（青森市） 〔東青・上北〕小松和恵（八戸市） 〔中南・下北〕淡路典子（八戸市） ※オブザーバー 上記4に書かれている講師
【13:00～15:30】 「学校支援ボランティア活動の 効果的な運営方法と今後の方向性」 ～コーディネーターの必要性～	講義	上記4に書かれている講師 〔西北〕 深作拓郎 〔東青〕 高橋 興 〔上北・中南〕佐藤晴雄 〔三八・下北〕廣瀬隆人

【2日目】

研修日程・内容	方法	講師
【10:00～10:30】受付		
【10:30～12:00】 「学校支援ボランティア活動の ニーズを掘り起こす」 ～学校現場で求められるボランティア活動～	講義・演習	各教育事務所社会教育担当者 上記4に書かれている講師 〔西北〕 深作拓郎 〔東青〕 高橋 興 〔上北・中南〕佐藤晴雄 〔三八・下北〕廣瀬隆人
【13:00～15:15】 「学校と地域の協働による教育活動の今後」	講義・演習	上記4に書かれている講師 〔西北〕 深作拓郎 〔東青〕 高橋 興 〔上北・中南〕佐藤晴雄 〔三八・下北〕廣瀬隆人
【15:15～15:30】研修のまとめ・アンケート記入・閉講式		

「平成22年度学校支援コーディネーター養成講座実施要項」より抜粋

イ 和歌山県教育委員会

子どもも大人も共に育ち、育て合う『きのくに共育コミュニティ』の形成

1 事業の実施状況

平成 20 年度に学校と地域の具体的な連携強化を図る目的で教育委員会内に組織横断型の共育コミュニティ推進室が組織される。時同じくして「学校支援地域本部事業」が開始されることとなり、それを活用しながら、平成 20 年度より、中学校区等を一つのまとまりとして、学校・家庭・地域が力を結集し、子どもたちを豊かに育み、人と人とのつながりを再構築することをめざした「地域共育コミュニティ」づくりを全県的に進めている。

和歌山県における地域共育コミュニティ本部の設置状況は以下のとおりである。

平成 20 年度 18 市町 20 本部（委託事業）

平成 21 年度 22 市町 24 本部（委託事業）

平成 22 年度 22 市町 24 本部（委託事業）

2 県の主な取組

きのくに共育コミュニティの全県的な展開として、参考資料のとおり「地域共育コミュニティ本部の拡充・支援」はもとより、「広報・啓発活動」「人材育成・活用」「市民性教育推進」等、広域的な連携による取組を実施している。

平成 20 年度には和歌山大学と市町村教育委員会の協力を得て、地域の教育力の必要性を啓発する「共育フォーラム」を全市町村（30 市町村）で開催した。このフォーラムでは地域の様々な立場の方から多くの意見が出され、子どもを中心とした、人と人とのつながりをつくる絶好の機会を得て取組をスタートした。

人材育成の面からは、従前より県単独事業として実施してきたコーディネーター等養成講座をはじめ、ボランティア活動地方別講座やコーディネーター等スキルアップ講座等の研修を実施している。

また、平成 21 年度には学校側の理解の必要性という課題を受け、教員対象の「学校と地域の連携を考える共育フォーラム」を県内 5 地域で実施し、平成 21 年度から 22 年度の 2 か年で約 400 名の参加を集めている。さらに、平成 22 年度からは県内全ての学校の地域連携担当教員等を対象に「共育コミュニティ研修講座」を年 3 回開催し、教員の理解促進と更なる取組の推進を図っている。

3 地域共育コミュニティの取組事例 〈海南市・翼地域共育コミュニティ本部〉

翼地区では約 10 年前から自治会を中心に 60 名余りのメンバーで遊歩道や公園の清掃や管理、公園の花植えなどをやってきた。このような活動をきっかけとして、地域住民と子どもたちとのふれあいが始まり、平成 12 年に翼区長会が学校をはじめ地域で活動する団体に呼びかけ「各種団体連絡協議会」が開催された。これを機に互いの活動に協力し合い、連携を図りながら子どもの育ちを支える活動を行うことを目的とした、「たつみの町づくり協議会」が立ち上がり、現在の翼地域共育コミュニティを進める基盤となっている。

主な取組としては、登下校の見守り活動である「子どもサポーター活動」、土曜日の居場所づくりとして「地域ふれあい行事」（15 回活動）、老人会が主体で中学生も参加する「学校内の花壇整備」、エプロンづくり、調理実習、稻刈り、木工授業等の「学校支援活動」であり、区長が地域共育コーディネーターとしての役割を果たしている。

4 事業の成果

地域共育コーディネーターに対する調査(H22)によると、学校支援活動を通じての学校や地域の変化については、「学校外でも子どもたちにあいさつをするようになった」「子どもや学校に対する意識や関心が高まった」「地域の中に入人や友人がふえた」など、学校や地域とのつながりについては概ね肯定的な評価を示しており、学校支援活動をおした地域理解はかなり深まったことを示す結果を得ている。

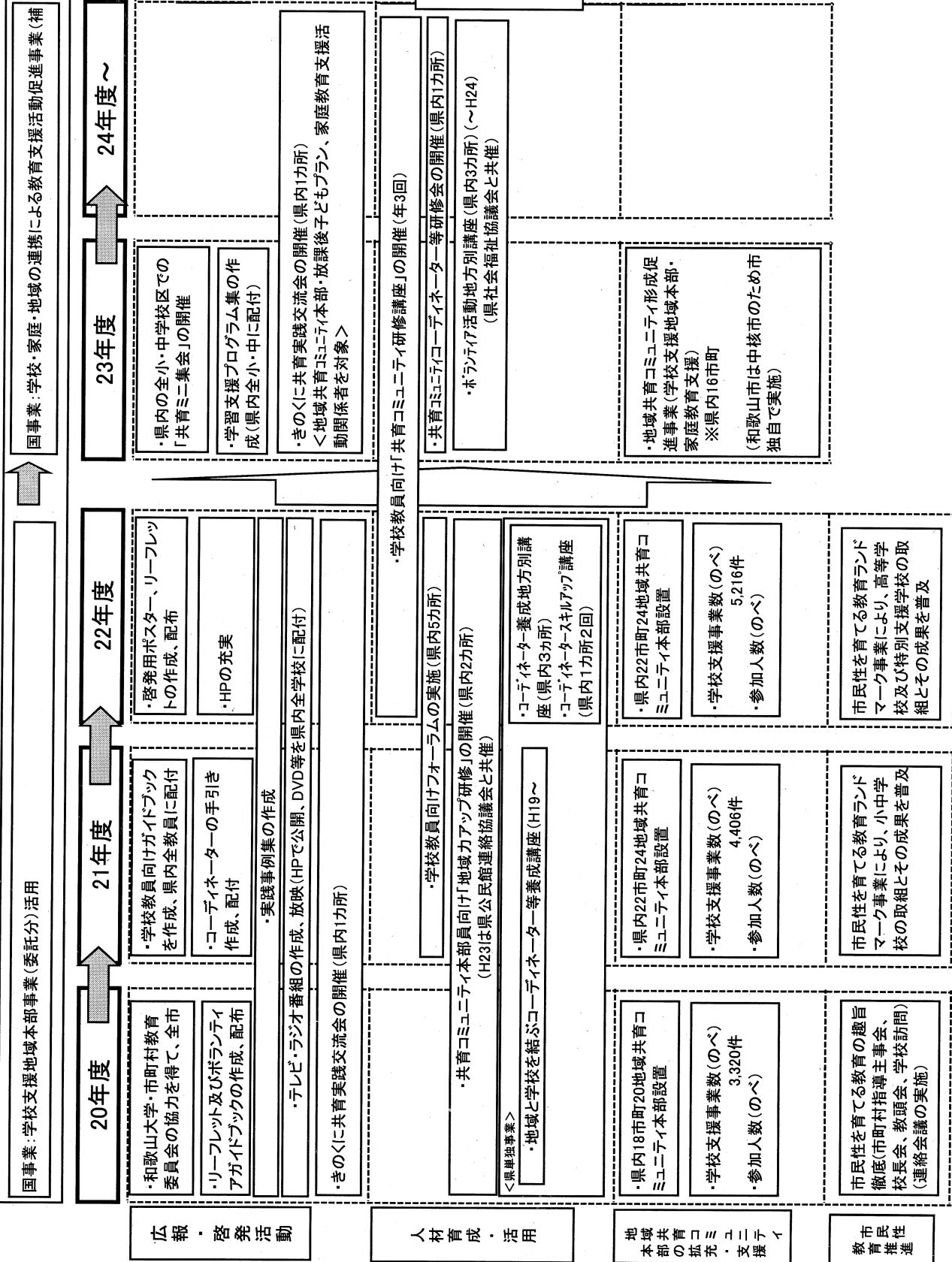
翼地区的活動者からの聞き取りでも「子どもたちのため、いつも試行錯誤している」「子どもたちとの距離が近くなり、子どもたちに対する気持ちが変わってきた」「やってきたことが無駄ではなかった」など、活動者自身の学びをおした生きがいと、人と人がつながる地域づくりの絶好の機会となったことがうかがえる。

また、「共育コミュニティの取組は地域に必要か」という質問に対し、「必要」という回答は 75.7% であった。必要な理由として、「子どもや学校に対する地域住民の意識が高まる」「地域ぐるみで子どもを育てるため」などの回答があり、学校支援活動が地域の活性化につながるという高い意識があることがうかがえる。

このように、和歌山県においては、「共育コミュニティ推進室」が中心となり、組織横断的に取組を推進していることが大きな特徴であり、「きのくに共育コミュニティ」の形成を進めることで、学校と地域の連携強化を図り、地域の教育力を高め、子どもたちの育ちと学びを支える学校づくり・地域づくりを推進している。

きのくに共育コミュニティの全県展開

共育コミュニティ推進室



ウ 奈良県教育委員会

学校・地域連携事業 ～地域拠点から子どもたちの体力・規範意識向上を～

1 事業の実施状況

奈良県教育委員会（以下県教委）では、従来から各地域や組織による地域ぐるみで子どもたちをサポートする体制づくりを推進してきた。平成20年度から新たに「学校支援地域本部事業（以下本事業）」を導入したことにより、多くの小・中学校に学校支援地域本部が設立され、平成22年度には39市町村中30市町村68地域本部で、学校をサポートする取組が進められた。現在は、平成19年度から実施している「奈良県地域教育力再生事業（放課後子ども教室）」と本事業を統合し、新事業「奈良県学校・地域連携事業」として奈良県の教育課題に直結した取組を実施している。新事業は、平成23年度においては30市町村中25市町村127校での実施に至っている。

2 事業の実際（方向性）

（1）平成20年度からの本事業の取組

奈良県学校支援地域本部事業運営協議会を設置して、本事業についての協議、検討、事業評価をおこなうとともに、県内市町村への広報及び指導助言、事業成果の普及等に取り組んだ。平成20年9月以来、9回会議を開催して、討議を進めてきた。

（2）平成23年度からの新たな取組「奈良県学校・地域連携事業」について

①事業の目的

・学校・家庭・地域が連携して、地域ぐるみで子どもたちの育ちを支える仕組みを構築する目的で始める。

②事業の背景

・学校における教育課題の多様化や地域の教育力の低下、全国学力・学習状況調査から見えた子どもたちの教育課題に対応する必要があった。

③事業の特徴

- ・学校や地域のニーズを的確に受け止めるために事業コンセプトの組み直しを実施（25市町村での実施）し、「放課後の学習支援等」「規範意識・社会性の向上」「体力・運動能力の向上」「地域との連携」の4つのメニュー化を図った。特に事業実施校においては「放課後の学習支援等」は必須のメニューである。
- ・学校・地域支援バイザーの配置（平成23年度から）があげられる。人権・社会教育課に1名（元「学校支援本部事業」実施校の校長）を配置して、事業実施にあたる市町村教育委員会や学校のサポートや県主催の研修等の企画立案に対するアドバイスを行うなどの業務にあたっている。

3 事業の成果

3年間、学校支援地域本部事業を実施し、学校支援ボランティア活動の取組状況調査（平成21年度6月実施）を行ったところ、次のように大きく4つの成果を得ることができた。1つ目は、地域の方々の学校運営への協力が進んだということ。2つ目は、安全安心な「まちづくり」が進んだということ。3つ目は、教師の子どもと向き合う時間が増えたということ。4つ目は、子どもたちの社会性、規範意識が向上したということである。また、各市町村学校支援地域本部にて、事業実施アンケート調査（平成22年度6月実施）を行ったところ「子どもたちの学力や規範意識、コミュニケーション能力の向上について効果は得られたか」との問い合わせに、得られた・ある程度得られたかを合わせると全体の74%、「教員が授業や生徒指導などにより力を注ぐことについて効果が得られたか」については、全体の58%が得られた・ある程度得られたとの回答があった。学校と地域を結ぶ取組として定着してきたと言える。さらに、奈良県の教育課題が明らかになり、その教育課題解決のために新たな事業を展開するに至った。

【参考資料】

奈良県

学校・地域連携事業
～地域視点から子どもたちの体力・規範意識向上を～

**事例
ファイル
(自治体編)**

奈良県

事業コンセプト

平成22年度まで実施してきた「学校支援地域本部事業」と「放課後子ども教室推進事業」は、ともに学校と地域で結ぶ取組として定着し一定の成果をあげてきました。

平成23年度には、これら二つの事業の成果を合わせ、さらに奈良県の教育課題解決に直結した取組を開拓すべく、事業コンセプトを組み直し実施することになりました。現在25市町村で実施しています。

具体的には、「放課後の学習支援等」「規範意識・社会性の向上」「体力・運動能力の向上」「地域との連携」の4つをメニュー化し、各市町村で成果指標に盛り込み目標設定をお願いしています。

財源は、文部科学省の「学校・家庭・地域の連携による教育支援活動促進事業」補助金を充て、県と市町村で1／3ずつを負担し、実施します。

放課後支援 ～より多くの体験を子どもたちに～

子どもたちの放課後の居場所づくりは、地域の協力でその活動に広がりをみせています。宿題や自習補助等の学習支援をはじめ、様々な体験活動を取り入れ実施しています。教員志望の学生や退職教職員などの協力を得て、部活動の指導補助からボランティア活動まで幅広い体験活動が準備されています。(右上の放課後活動の例を参照)



能教室～地元の伝統芸能に触れる～



美術の授業(木の話)～ゲストティーチャーに学ぶ～

放課後活動の例

①学習支援

宿題片付け隊、自学補助、読書活動、読み聞かせ、各種講座(産業・歴史等)など

②クラブ指導とその他の体験活動

国際文化交流、地域の祭への参加、福祉施設訪問、防災体験学習、野外活動体験、環境保全活動、人権講座、職場体験活動、乳幼児とのふれあい体験、イモ掘り、フィールドワーク、交通安全教室、茶華道、合唱、太鼓、琴、空手、剣道、サッカーなど

③交流活動(小学校低学年向け)

紙飛行機、折り紙、グランドゴルフ、ドッジボール、シャボン玉、そろめん等、など、おもしろい、おにぎこ、昔遊び(竹馬、駒馬、コマ遊び)

④ボランティア活動

ゴミ拾い、清掃活動、夏祭りボランティア、地域クリスマス会への参加、介護ボランティアなど

規範意識・社会性の向上 ～地域全体で子どもを見守りはぐくみます～

異なる世代間の交流は、子どもたちに新たな気付きを生みます。また、地域の子どもたちは地域全体で見守りがぐくんでいくういう温かい雰囲気が各地で醸成されつつあることから、子どもたちの規範意識・社会性の向上につながると思っています。職業体験実習やゲストティーチャーによる授業なども準備しています。

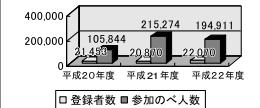
体力・運動能力の向上

～もっと元気で健康な大和っ子に～

運動場芝生化推進事業や地域のスポーツクラブとの連携をすすめ、元気で健康的な大和っ子を育てます。外遊びの奨励、運動時間の増加、イベント等の活動内容を充実させ、子どもたちの体力・運動能力向上や仲間づくりを推進します。



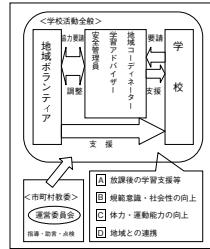
「運動場が芝生になったよ!」～運動場芝生化推進事業～



地域と学校がより緊密に連携するためには

○地域ごとの課題解決のために事業が組み立てられてはじめて、本来の意味での地域の事業になります。そのためにも学校や地域のニーズを的確に受けとめたいと思っています。

○多くのボランティアが学校に集う現状(上グラフ参照)は事業の確かな成果です。この仕組みを、多くのつながりを生む基盤と考え、さらに新たな取組につなげたいと考えています。



《お問い合わせ先》
奈良県教育委員会事務局 人権・社会教育課
〒630-8502 奈良県奈良市竜大路町30
☎0742-22-1101(内5284) /
☎0742-27-9837(直通)

地域との連携

～もっと地域密着！子どもたちの元気を地域に～

地域ボランティアの方々は学校での活動に積極的に参画してくださっていますが、今年度は、子どもたちが地域の行事などに積極的に参加するなど、地域との連携をより一層深める試みを計画しています。子どもたちの元気を地域に還元し、地域の活動を活性化する効果を期待しています。



梨園にて学習～地元で体験学習～

提 ～今後の事業充実に向けて～

学校関係者に対して

学校が困っていることをもっと助けてもらいましょう

○学校の要望をはっきりさせましょう

●学校の施設設備を地域に開放するだけでなく、学校運営、教育活動を開かれたものにする考え方が浸透させてきています。教育活動をより充実させるには地域の協力が不可欠です。

●学校が地域に望むことを明確にし、共通理解を図り、その上で地域との密な連携を進めましょう。

○学校の仕事を手伝ってもらいましょう

●地域には様々な知識・技能をもった方がおられます。地域の人材は学校教育を進める上で、重要な資源です。

●子どもたちに様々な体験を積ませることは大きな教育効果を生みます。体験活動を充実させるためにも、地域の方々との協働を図りましょう。

○校外で学習活動を展開しましょう

●生活科、総合的な学習の時間等を活用し、職場体験活動をはじめ、子どもたちはより豊かな体験活動を積んでほしいと願っています。

●地域の協力を得て、積極的に校外での体験活動を展開してほしいと思います。

○学校の情報を発信しましょう

●地域の協力を得るには、教職員が胸襟を開いて深く交流し、積極的に情報発信する姿勢が大切です。

●学校が困っていることを地域の方々に知つていただきことも大切な情報発信です。情報の共有が連携の第一歩です。教職員が努力奮闘する姿を知つていただくことも必要ではないでしょうか。

地域コーディネーターの方々には学校の要望と地域ボランティアの協力をうまくつなぐ役割を果たしてもらっています。連絡調整のキーパーソンです。

様々なご苦労をおかけしていますが、この人と人との連携の輪が地域の活性化につながります。



地域の方々に対して

学校の活動や運営に参加しましょう

○地域ぐるみで子どもを育てましょう

●子どもたちは地域の宝です。少子化的時代には、ますます大切に感じられます。

●地域ぐるみで子どもたちをはぐくむ活動に協力し、少しずつでも力を出し合っていただきたいと考えています。



市町村教育委員会及び県教育委員会に対して（学校支援地域本部に対して）

学校の支援体制を一層充実させましょう

○学校・地域の声を受けて進めましょう

●本事業は、文部科学省の委託事業としてスタートしましたが、本来は地域独自の事業として多様な取組を展開していくことを思っています。

●地域ごとの課題解決のために組み直されたとき、はじめて本来の地域主導の事業になります。

学校や地域のニーズを的確に受けとめてほしいと思われます。

○事業への理解を一層進めましょう

●多くのボランティアの方が学校に集う現状は、この事業の確かな成果です。

●この仕組みを、多くのつながりを生む基盤と考え、さらに新たな取組につなげていきます。そのためにも行政の力を活かした広報・周知活動が大切になります。

○研修機会を提供しましょう

●この仕組みを機能させるには、学校関係者も地域の方々もそれぞれ研修の機会が必要です。

●各市町村教育委員会においては関係者が集い学ぶ機会を継続的に設け、県教育委員会は情報提供や研修プログラムの開発、ネットワークづくりへの支援をつづけていくべきであると考えます。

「地域の子どもたちは地域で育てる！」と
いう地域住民の熱い思いを受けとめて、
新しい事業を推進してほしいですね。



○持続可能な体制を整備しましょう

●地域の活性化につながるような、それぞれの地域にふさわしい組織・体制の構築が必要です。

●市町村におきましても、事業継続のために運営資金を確保し、予算措置をお願いします。地域住民の熱い思いを受けとめていただきたいと思っています。

奈良県学校支援地域本部事業運営協議会「学校支援地域本部事業のまとめと提言」より抜粋

エ 新潟市教育委員会

学・社・民の融合による人づくり、地域づくり、学校づくり～「地域と学校パートナーシップ事業」をとおして

1 事業の経緯と目的

新潟市教育委員会では、平成18年3月に「新潟市教育ビジョン」を策定し、「学・社・民の融合」^{注1}の考え方を根幹に据えた。そこで、平成19年度に「地域と学校ふれあい推進課」を新設し、「地域と学校パートナーシップ事業」を開始した。平成20年からは「学校支援地域本部事業」の委託・補助を受けての実施となった。

事業の目的は、学校に地域教育コーディネーター（以下「コーディネーター」）を配置することで、学校を核とした「社」「民」とのつながりをスムーズに行うことであり、以下の4点を大きな柱としている。

- ①学校と社会教育施設、地域活動を結ぶネットワークづくり
- ②学校の教育活動・課外活動における地域人材の参画と協働
- ③学校における学びの拠点づくり
- ④学校の教育を地域に発信

平成19年度に8校の実施でスタートしてから、平成22年度までに105校、平成23年4月1日現在では、小学校96校、中学校43校の合計139校での実施がなされている。また、市では平成26年度までに市内全171小中学校での実施を目指している。

注1)ここでの学・社・民とは「学：学校」「社：公民館や図書館などの社会教育施設やスポーツ施設」「民：地域住民・家庭・地域の諸団体や企業」を指す。

2 事業の特色

実施にあたり、市内全校で一斉に開始するのではなく、コーディネーターの配置、コーディネーター専用室の確保等「その学校の準備が整い次第実施する」という方針で進めており、各校の自主性を重んじることで、受動的ではなく、能動的な取組となるよう配慮している。

コーディネーターは市の非常勤職員として採用されており、週16時間の勤務を基本としている。このため、コーディネーターは市職員としての自覚のもと責任感を持って職務に励んでいる。また、実施各校にはコーディネーターの勤務場所となる専用室が設置されており、この場所が情報交換の場となり、同時に憩いの場ともなり、関係者間のコミュニケーションを図りやすくするために一役買っている。

さらに、学校側の理解を深めるために、10年目研修や管理職研修に事業の説明を位置付けるとともに、要請に応じて指導主事を派遣し、校内研修を開くなど、学校全体の理解のもと事業が実施されるよう努めている。また、「地域と学校パートナーシップ事業運営協議会」を設置し、コーディネーターや学校担当教職員など関係者向けにも各種研修^{注2}等を実施している。

注2)研修例：新規実施校研修会 地域と学校パートナーシップ事業研修会 学・社・民の融合で元気アップ講座 等

3 事業の成果

平成22年度に105校を対象に実施した「地域と学校パートナーシップ事業アンケート調査」からは、以下のような成果が得られており、この事業の「学・社・民の融合」にもたらした効果の大きさをうかがうことができる。

- 実施校の取組を通して、学校・保護者・地域住民・社会教育施設職員に、学・社・民の融合による教育のよさを示すことができ、児童生徒の指導のために協力して教育活動に取り組む姿が見られた。
- 学校支援ボランティアが加わったことにより、学習活動が充実したり子どもの学習意欲が高まったりするとともに、子どもが認められる機会が増えた。
- コーディネーターを通して、地域や家庭・社会教育施設と積極的にかかわることのよさを、教職員が理解するようになってきた。その結果として、教職員の多忙感の軽減にもつながっている。
- 地域教育コーディネーターだよりや学校だより、各区の区報を通して、各校におけるボランティア活動やコーディネーターの取組について地域住民への周知が図られ、地域住民の学校への理解が深まっている。

【参考資料】



さうがいを育つつなぎ



子育てサークルの活動にインパクト



地域住民が「活躍」で発展



ヘルス・农场をつくる



法律づくりは任せて

子どもも大人も元気になる具体的な取組

学習活動への参画

① 専門的な知識や技能を生かした学習支援

- ・英語活動、国際理解教育支援・補助
- ・資源指導補助（ＴＴ）
- ・キャリア教育（職場体験、生き方講話）
- ・自分の進路や趣味を生かして
 - 例：大学教授、アナウンサー、書道、書写や唱歌
 - ・作物の栽培や幼稚園の指導（※・野菜づくり）
 - ・本の読み聞かせ
 - ・放課後や長期休暇中の学習指導・補助
 - ・クラブ・部活動での指導・協力（見守り）

② 自分の生活体験を生かした学習支援

- ・昔の遊び（コマまわし、あやとり、竹とんぼ、お手玉、けん玉）
- ・「道争」（体験を語る）
- ・「道選」（授業に参加し大人の立場で発言（例：はじめを考える）
- ・「家庭」（手編み、ミシン縫い、料理実習）
- ・「保育」：子育て中の母親が「命の大切さ」について語る
- ・地域資源を生かした体験活動（庭づくり、畦地づくり、鮎川魚放流）
- ・地域の○○を語る（総合学習）
- ・達成のための意匠指導

③ 人的な支援

- ・校外学習の巡回補助
- ・過疎特待の学年安全見守り隊（エーフィースタッフ）
- ・図書ボランティア（本の修理、図書の整理・整頓）
- ・保護者懇親会やPTA総会等の子どもの見守り
- ・歩き走り記録会や交通安全教室、体力テストの見守り・補助作業

体験活動

- ・ミニ講座や文化祭での体験教室
 - 例：生け花、茶道、囲碁、将棋、絵画、手話、結手紙、紙漉、わら細工、太鼓、横笛
- ・地域の○○吉澤や○○喜久の相導（運動会や祭りで地域住民とともに楽しむ）
- ・季節の食べ物づくり（苞豆子、ちまき、ちらし寿司と巻き寿司）
- ・収穫した作物や校庭にある果樹、観察が終わった植物の活用
 - 例：米粉のクッキー・まんじゅう・うどん、干し柿・さわし柿、梅干・梅ジャム、ハーブティー・ハーブ石鹼、ハーブクッキー、甜品のリース・麻油石鹼づくり

子どもの居場所づくり（ロングの休み時間、昼休み、放課後、休業日）

- ・ふれあいスクール
- ・ものづくり（手芸、クラフト、おり紙）やお話し相手（聞き手）

環境整備

- ・校舎内のクリーン作業（校舎をきれいに大作戦）
- ・中庭や花壇、連锁塾の整備
- ・学校の春やバラのゾーナ、朝霧のトンネル

社会教育施設や地域団体とともに

- ・「お寺でごーん！」（地域の寺での宿泊体験（座禅・錢湯体験、儀式、朗誦、集団登校））
- ・サークル指導者やメンバーによる出前（紙芝居、○○コンサート、お茶会）
- ・専門委員会や部活動との連携
 - 例：「食や英養」について保健委員会と一緒に活動、吹奏楽部が○○施設で演奏
- ・大人とのコミュニケーションを図る授業（サークルとの交流活動）
- ・読み聞かせボランティアの日（校歌で歌祭、図書館職員が出前指導→自ら研修会）

「学びの拠点」としての役割

① 学校施設の活用

- ・学校支援本部における学習活動、交流活動
- ・コンピュータ室利用によるパソコン教室
- ・地域のサークル活動
- ・公民館活動を学校で
 - 例：フレママ教室を小学校で（校長講話、授業見学・参加）
 - ・子育てサークルの活動場所（子育て情報交換）
 - ・幼・小連携、小中連携による料理教室（早起き・朝ごはん）

② 学校人材の活用

- ・○○先生のパソコン教室
- ・○○先生の実習教室
- ・○○先生のまゆ吉コサージュ教室

地域とともに

- ・ジュニアレスキュ（いざというときは、大人とともに）
- ・一人暮らしのお年寄り訪問
- ・地域を学ぼう（地域住民が先生方に教えます）
- ・地域の美化活動（○○川クリーン作戦、駅前広場でプランターに花植え）
- ・地域のお祭りで小中学生がボランティア



どんぐりの森をつくろう



「お寺でごーん！」
午睡・早起き・朝ごはんみんなで実験



放課後の学習教室で図書はバッチリ



ねじて紹介（公民館とともに）



ジュニアレスキュ（いざというときは大人と一緒に）



事業の目指す姿

子ども が元気に！

夢や目標に向かい
いきいきと学ぶ姿
学・社・民が融合し、心豊かな子どもを育むために、地域ぐるみの教育が行われる



相談みがきたよ

地域住民が積極的に図書推薦

学校 が元気に！

- ① 地域の人材を生かした、多様な学習や活動
- ② 見守られ、認められる場が広がり、安心感や所属感を味わい、自己有り感や前向き意識、コミュニケーション能力等が向上
- ③ 学校運営に対する地域の学校理解の深まり、特色ある学校づくりの発展

社会教育施設（公民館、図書館）

学・社・民の融合をスムーズに進める核となる 「地域教育コーディネーター」が活躍中!!

学校を拠点とし、地域、社会教育施設と学校の協働によって次のようない效果を期待しています

- ・子どもの多様な可能性を生かす場・認める場の拡大、充実
- ・子どもの活動や学習の質を高める機会の確保
- ・地域の大人が豊かに元気になる（自己実現、生涯学習実現の場）

学・社・民の融合

新潟市教育委員会 地域と学校ふれあい推進課

〒951-8550
新潟市中央区学校町1番町602号地
TEL 025-226-3277 FAX 025-230-0421
E-mail: furearei@city.niigata.lg.jp
URL: http://www.city.niigata.lg.jp

地域と学校パートナーシップ事業

「地域と学校パートナーシップ事業」では、

学校が今まで以上に地域に開かれ、地域と共に歩むことができるよう、「学・社・民の融合による教育」を進め、様々な活動に取り組んでいます。

事業の 目指すもの

- ① 学校、社会教育施設、地域活動を結ぶネットワークづくり
- ② 学校の教育活動・課外活動における地域人材の参画と協働
- ③ 学校における学びの拠点づくり
- ④ 学校の教育を地域へ発信

本事業による「学・社・民の融合」イメージ



子どもがいだぞ

新潟市教育委員会
地域と学校ふれあい推進課
文部科学省委託・補助事業
「学校支援地域本部事業」